SHOW-HEY シネマルーム

★★★★

デリシュ！

2020 年／フランス・ベルギー映画
配給：彩プロ／112 分

2022（令和 4）年 9 月 3 日鑑賞　TOHO シネマズ西宮 OS

Data　２０２２－１０３

監督・脚本：エリック・ベナール
出演：グレゴリー・ガドゥボワ／イザベル・カレ／バンジャマン・ラベルネ／ギョーム・ドゥ・トンケデック／ロレンゾ・ルフェーブル

みどころ

社会主義に対する資本主義の優位が明白になった今も“格差の増大”が叫ばれているが、１７８９年の革命勃発直前のフランスでは？今では街のどこにでもレストランがあるが、食を王侯貴族が独占し、料理人はその奉公人であったあの時代、“デリシュ”を創作した料理人は一体ナニを目指したの？

“弟子入り”をせがむ謎の女や、復讐物語の展開（？）など、ＮＨＫの朝ドラ『ちむどんどん』に比べてもかなりバカバカしい物語だが、それが意外に面白い。

土地は誰のもの？それは弁護士の私のライフワークだが、料理は誰のもの？そんな切り口でフランス革命を考えてみるのも一興だ。

復讐に成功し、レストランも大盛況の中で迎えるフィナーレに拍手しつつ、“デリシュ”に乾杯！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■食の革命も、1789 年のフランスで！？■□■

おいしい食べ物をネタにした映画や、レストランの厨房内部に立ち入った料理番組のような映画は最近多いが、私はそれらを基本的に見ていない。しかし、美食の国フランスで１７８９年に起きた革命前夜にはじめて“レストラン”を作り、“食の革命”を起こした男の人間ドラマ、と聞けば、そりゃ必見。

１７８９年当時のフランスにレストランはなかったの？そう言われると意外に思えるかもしれないが、当時のフランスでは、料理は王侯貴族のものだったのは、ある意味、当然。したがって、庶民（平民）が誰でも自由に入れる“レストラン”など、まだ存在しなかったのも当然・・・？

本作冒頭、シャンフォール公爵（バンジャマン・ラベルネ）に父親の代から仕えている

料理人マンスロン（グレゴリー・ガドゥボワ）が、公爵の親しい友人（貴族）を招いた食事会で腕を振るう風景が映されるが、その贅沢さにビックリ。革命前夜のフランスの身分制度がこれほどのものだったとは！これでは、マリー・アントワネットが「食べるものがなければケーキを食べればいいのに・・・」と正直な心音（？）を語ったことの意味もよくわかるというものだ。

■□■料理は誰のもの？“デリシュ”に激怒！それはなぜ？■□■

モーツァルトやベートーベン、ショパンやシューマン、さらにチャイコフスキー等の歴史上有名な音楽家の（伝記）映画は多いが、『アマデウス』（８４年）を観れば、モーツァルト時代の音楽は王様や貴族のためのものだったことがよくわかる。したがって、“宮廷音楽家”を目指す音楽家が、こぞって王侯貴族に好かれる音楽を作ろうとしたのは当たり前。若き日のモーツァルトも完全にそうだったことは明らかだが、その晩年は・・・？

モーツァルトですらそうだったのだから、親の代からシャンフォール公爵に仕える料理人だったマンスロンは、シャンフォール公爵の忠実な料理人だったはず。ところが、本作冒頭の食事会のデザートとして、マンスロンは、当時は豚の餌だったジャガイモをメインにした創作料理「デリシュ」を提供したからビックリ。料理にうるさいシャンフォール公爵はメニューもすべて自分が決め、勝手な料理を出すことを厳禁していたのに、マンスロンがあえてその禁を犯したのは一体なぜ？客からの不評の声を一身に浴びたシャンフォール公爵はマンスロンに謝罪を命じたが、さてマンスロンは・・・？

■□■女が料理人に弟子入り？その目的は？女の正体は？■□■

頑なに謝罪を拒否したため、シャンフォール公爵の料理人をクビになったマンスロンは息子のパンジャマン（ロレンゾ・ルフェーブル）と共に実家に戻り、失意の日々を送っていた。ある日、そこにルイーズ（イザベル・カレ）が「弟子にしてほしい」と申し入れてきたところから、本作の本格的物語が始まっていく。

NHK の朝ドラ『ちむどんどん』は、料理人を目指す次女の暢子を軸に面白い物語が進んでいるが、それは現代ドラマなればこその話。“レストラン”という概念すらなく、料理人はすべて王侯貴族のお抱えだった１７８９年当時のフランスで登場する、そんな物語はあまりに不自然だ。手が綺麗なことに気付いたマンスロンの追求の前に、ルイーズは自分が娼婦だったと認めたが、マンスロンはそんなルイーズの弟子入りを許すの？そもそも、マンスロンは今、何の料理も作っていないのだから、弟子入りも何も・・・。

本作で興味深いのは、料理よりも気球に乗って空を飛ぶことに興味を示す一人息子パンジャマンの存在。彼はパリの情報にも通じていたため、王侯貴族に対する庶民の反抗が高まっている現在、自分もそれに参加したいようだが、今は失意の父親を慰めることに重点を置いているらしい。そんな息子の提案が、王侯貴族のための料理ではなく、一般庶民のための料理の提供だが、人間が空を飛べないのと同じように、そんな夢みたいなことはとてもとても・・・。

■□■３つの人間関係を軸に、面白い物語が！■□■

料理をテーマにした映画では、料理の魅力で観客を引っ張っていくものが多い。しかし、原題も邦題も『デリシュ！』（英語のデリシャスと同じ、フランス語で「おいしい」の意味）とした本作は、それ以上に①シャンフォール公爵とマンスロンとの主従関係、②マンスロンとルイーズとの師弟関係、③マンスロンとパンジャマンとの父子関係、に注目しながらストーリーを進めていくところが面白い。さらにそこでは、公爵の執事（ギョーム・ドゥ・トンケデック）がマンスロンとシャンフォール公爵の接着剤（？）として、もっと大きく言えば、貴族と庶民のどちら側につくかについて、大きな役割を果たすので、それにも注目！

女のルイーズが料理人マンスロンへの弟子入りを希望する本作導入のストーリーからしてその不自然さは明白。また、いくらルイーズが娼婦だったと告白しても、その不自然さは解消しない。そのうえ、やっとマンスロンとシャンフォール公爵との“接点”が復活し、パリからの帰り道にシャンフォール公爵がマンスロンのレストランに立ち寄り、料理を食べることが決まると、それを手伝うルイーズはある奇妙な行動をとるので、それにも注目！彼女が料理の中に密かに入れているものは一体ナニ？ひょっとして、これは毒？すると、ルイーズの本当の正体は一体ナニ？

本作中盤からは、そんなスリルとサスペンスに富んだストーリー（？）が始まっていくので、そのことの賛否を含めて、それに注目！

■□■開店はＯＫ？公爵への復讐は？映画ならこれもＯＫ！？■□■

『ちむどんどん』では、９月８日現在、やっと開店にこぎつけた店への来客が減る中、次第に店の経営が行き詰まっていくストーリーになっている。暢子ほどの頑張り屋の料理人でもそうなのだから、１７８９年というフランス革命前夜の激動の中、庶民を対象に、誰でも入れるレストランをつくるなど、夢のまた夢。それこそ、人間が空を飛ぶようなあり得ない物語だ。そう考えるのが普通だろう。

そもそも、当時の貨幣の流通の程度は？食材の仕入れは？冷蔵庫も冷凍庫もない時代、在庫管理は？そんな疑問が次々に湧いてくるが、そこは、たかが映画、されど映画だ。本作ラストに見るマンスロンとルイーズのシャンフォール公爵への鮮やかな復讐の完成と、新規開拓したフランス初のレストランの繁盛ぶりをたっぷり楽しみたい。

２０２２（令和４）年９月８日記